

平成30年2月25日、市長は、東名古屋医師会主催「第14回東名古屋医師会市民公開講座」で行われた、看取りをテーマにした芝居に出演し、人生の最期を在宅で過ごし、在宅で看取られる役を体験しました。

そのときに感じた感想について、政策秘書課職員との話です。

生活の音

今回のお芝居で、私は、末期のがんで、在宅で看取られ、納棺される役を体験しました。芝居中、ずっと目を閉じて、布団に寝たままの状態でしたが、家族役が周りで洗濯物をたたみながら話をしたり、お茶を入れたり、来客を告げるチャイムが鳴ったりと、常に



耳には、生活から発せられる音が聞こえてきました。病の身にあって、住み慣れた家で家族の気配を感じながら過ごすことは、何よりも心の平穏につながると感じました。そして、人生の最期を迎える場面では、耳元で妻役から、何度も何度も「今までありがとう、ありがとう」と言われ、涙が出ました。「聴覚は最後まで残る」と言われていますが、「きっと本当のことだろう」と思いました。

私自身、若いときに、半年近く入院をした経験がありますが、病院では、医師や看護師が近くにいても、家族や友人がお見舞いに来てくれても、一人で過ごすさみしい時間の方が長いものです。在宅で療養するとき、家族が仕事に行ったり、学校に行ったりして、居ない時間があるとしても、やっぱり家がいいのです。

多くの人が、「住み慣れた家で、最期を迎えたい」と希望しながらも、家族への負担を考えると、病院を選択せざるを得ない状況にあります。家族からすると、「何かあったら、どうしたらいいか分からない、不安だ」という思いから、在宅療養や在宅で看取るという選択が、簡単ではないことも理解できます。

家族だけで在宅療養を支えようとすると、気が張る毎日で、くたびれてしまいます。定期的に医師やヘルパーが来てくれますが、そうした専門家だけでなく、近所の人が気に掛けてくれて、窓からのぞいて話し相手になってくれたり、買い物を頼むことができたりと、ご近所のちょっとした助けがあることが、療養して

いる本人にとっても、家族にとっても非常にありがたいはずです。そのためには、元気なときから、隣近所が声を掛け合うことが必要です。

今後、在宅での療養や看取りは、増えていかざるを得ません。私達が、療養している本人の立場から、在宅での療養や看取りについて考えることができるようになるためには、自分や自分の家族の最後について考える機会や、在宅での療養や看取りを経験した人の話を聞く機会が増えていくことが必要だと思います。今回、医師会を始め、関係者の方々に、そうした機会を設けていただいたことに感謝しています。

～市長の話を聞いて～

私は、今回の芝居のリハーサルに市長の代理として出ました。私も、妻役に耳元で「ありがとう、ありがとう」と言われたとき、涙が止まりませんでした。実際は、痛み等もあって、芝居ほど単純な話ではないのかもしれませんが、私も人生の最期は、病院ではなく、家族のそばに居たいなあと思いました。

この話をインフルエンザを経験した上司と話したら、「高熱で辛いとき、家族の気配を感じるだけで、ありがたいと思った」と言っていました。今回の芝居のような亡くなる間際の疑似体験は難しくても、病気をして寝込んだことをきっかけに、「自分や自分の最期のあり方」を想像し、家族で話し合ってみることで、在宅療養や在宅での看取りについての議論が深まるのではないかと思います。